

わびの氣の朝

Time Cannon Go Back

2022.5.14[土]–7.18[月・祝]

京都芸術センターギャラリー北・南・和室ほか

10:00–20:00 | 6.8[水]は臨時休館 | 入場無料

イベント情報

■アーティストによるギャラリーツアー

アーティスト自身が、本展出展の各作品についてお話しします。

日時：2022年5月15日（日）11:30～13:00

集合場所：京都芸術センター エントランス

ナビゲーター：伊東宣明

聞き手：藤村南帆（本展企画補助）

進行：中谷圭佑（京都芸術センターアートコーディネーター）

■アーティストトーク

ゲストを迎え、アーティストが制作や作品について語ります。

日時：2022年7月2日（土）15:00～17:00

会場：京都芸術センター フリースペース

登壇：伊東宣明

ゲスト：居原田遥（キュレーター）

進行：谷竜一（京都芸術センター プログラムディレクター）

■《生きている／生きていない》ライブパフォーマンス

伊東宣明の代表作《生きている／生きていない》の

「心音に合わせて肉を叩く」パフォーマンスを実施します。

日時：2022年7月18日（月・祝）19:30～20:00

会場：京都芸術センター フリースペース

出演：伊東宣明

伊東宣明 ITOH Nobuaki

1981年奈良県生まれ。現在は京都を拠点に活動中。

2016年、京都市立芸術大学大学院美術研究科 メディア・アート専攻（博士後期課程）修了・博士（美術）学位取得。

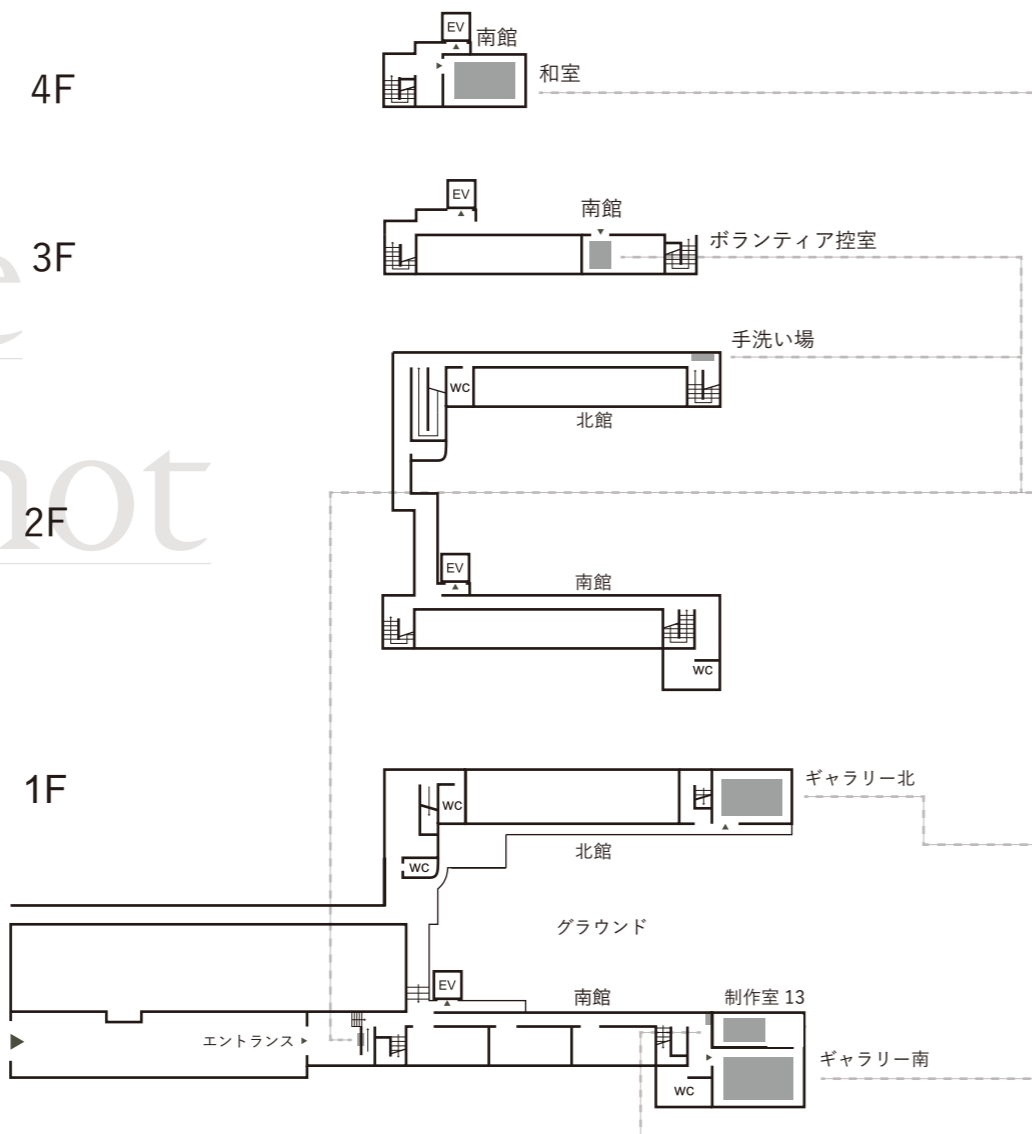
主な個展に「アート」（愛知県美術館、愛知／2015）、「アートと芸術家」（WAITINGROOM、東京／2016）、「生きている／生きていない 2012-2017」（ギャラリー16、京都／2017）、「フィクション／人生で一番美しい」（WAITINGROOM、東京／2018）、「されど、死ぬのはいつも他人ばかり」（The 5th floor、東京／2020）。主なグループ展に「レゾナンス 共鳴人と響き合うアート」（サントリーミュージアム、大阪／2010）、「GRAVEDAD CERO」（Matadero Madrid、マドリード・スペイン／2015）、「S-HOUSE ミュージアム開館記念展」（S-HOUSE ミュージアム、岡山／2016）、「Over the fence」（コートヤード HIROO、東京／2021）。

主催：京都芸術センター（公益財団法人京都市芸術文化協会）

協力：WAITINGROOM

時は戻らない

Time Cannot Go Back



伊東宣明はすでに一定の実績ある作家だが、拠点である京都での個展の機会は意外なほど乏しい。本展は、彼の初期作品から近作までを一挙に鑑賞できる場として設計している。伊東は一貫して「生／死」「精神」「身体」そして「時間」といった、人間にとって逃れがたい概念に向き合っている。本展では特に「時間」に関連した作品を取り扱っているが、これはすなわち時間メディアである「映像」への伊東の洞察を示すものでもある。

新作《時は戻らない》は、逆再生を用いた映像作品である。「何も起こらなくなっていく」ことへのおどろきと、同時に感じるこの居心地の悪さはなんだろうか。仮に「時を戻す」ことができたとして……何かを喪ったことや、取り返しのつかないことが、何事もなかったことになったとしても、それでもその時間に何かがあるような気がするのなぜなのだろうか。

伊東の作品群をみながら、私たちは様々なことを連想する。周囲が様々なメディアにあふれていることや、その映像／表現が操作可能である、あるいは予め操作された現実として出現していること。時間が流れることを痛感し、個人的もしくは社会的な事件を思い返して、ノスタルジーやアイロニーに浸ることもできるだろう。しかしそこで思い出されるものそれ自体は、本質的には伊東の作品とは関係がない。《死者／生者》において、伊東の生と祖母の生が、鑑賞する我々には肉薄しているようにみえていながら、実際にはまるで別個の出来事であることのように。

撮影された私たちはやがて映像から離れ、映像は過去のものとなる。私たちは映像から切り離され、それぞれに生きている。しかしまた同時に時を経て、作品としての映像の前に、ふと立ち止まったりもする。伊東は、人間にとっての根源的なテーマを取り扱いながら、私たちが「生きて、ともに観ている」ということの不可思議さもまた、同時に取り扱っているのだ。

谷 竜一（京都芸術センター プログラムディレクター）

作家による解説

《死者／生者》2009年、2チャンネルビデオ、サウンド、11分05秒

「もはや、死は絶対ではない」という言葉は、映画の父として知られるシネマトグラフの発明者リュミエール兄弟が、映画を作り上げたときに言ったとされている。この言葉は、すでに死んでしまった人も、映像の中であれば自由に歩き回ることができるという意味だけでなく、映像そのものが孕む「死」も示唆している。

本作品は、「祖母（故人）が過去を語る5年前の映像と最期の映像」と「作者自身が祖母の記憶を語る映像」という2つの音声（歌）と映像により構成されている。ここでは、「死者になろうとしている生者」を「生者」がなぞり、「生」に含まれる「死」を露呈させることを試みる。

《0099 (Kyoto2013 Ver.)》2013年、シングルチャンネルビデオ、サウンド、24分11秒

館内各所に展示される本作品は、00から99までの数字が印刷された紙を、ハンディカムビデオカメラのズームアウト機能のみを用いて、京都市内各所で撮影したものである。00から99へ、そして00へと戻り再び99へと永遠に続く映像は、一見ループしているようにみえるが、実際は1カ所につき10パターン撮影し、それを組み合わせた約1,000カットからなる映像である。

【注意】 ギャラリー北に展示している《蠟燭／切り花／眠り／煙》は、上半身が裸の男性が自ら皮膚を剥いていくような映像作品です。《生きている／生きていない》は、上半身から下腹部までが映った裸の男性が、食肉用の生肉を叩く映像作品です。ご了承のうえご入場ください。

《生きている／生きていない》京都芸術センター編集 Ver. 2012年～、シングルチャンネルビデオ、サウンド、30分
※個々のキャプションは会場内に掲示

2012年より撮影場所を変えながら継続的に制作している本シリーズは、自身の鼓動にあわせて死んでいる肉を叩く作者が、徐々に歳を重ね、死んでいる肉へと変化する自らの身体を記録したものである。いずれ作者が死んだ時に作品は完成し、映像は「生きている」ことを伝え続ける。

《蠟燭／切り花／眠り／煙》
2020年、シングルチャンネルビデオ、サウンド、1時間
本作品では、作者が、蠟燭／切り花／眠り／煙／剥製／果物／聖書／砂時計／骨など、世界中で絵画のモチーフとして描かれる死のメタファーを発しながら、自らの皮膚を剥いていくような映像が映される。くりかえし皮膚を剥ぐ様子は、細胞自体の入れ替わり＝新陳代謝のようにも見えるが、それもまた緩やかに死に向かう過程といえる。

《人生で一番美しい》

2018年、シングルチャンネルビデオ、サウンド、8分53秒
本作品では、レオナルド・ダ・ヴィンチの《モナ・リザ》と同年代である20歳前後の男女約20名が、絵画と同じポーズをとり「今、私は人生で一番美しい」と10年後、100年後、1000年後の鑑賞者に向けて宣言する。しかし、これはあらかじめ作者が用意し、出演者たちによって読み上げられた虚構の宣言である。1000年後も劣化しない（であろう）デジタルの映像は、逆説的に出演者の有限の身体を意識させ、この虚構の宣言が、10年後、100年後、1000年後の鑑賞者に事実として受け入れられることを想定している。

《時は戻らない（2020-2022）》

2020-2022年、シングルチャンネルビデオ、サウンド、1時間14分
ルネ・マグリットの油彩画である《イメージの裏切り》に着想を得て制作した本作品は、誰もかが否応なく巻き込まれてしまった2020年から2022年のコロナ禍に、作者が日々の生活の中で撮り溜めた映像によって構成されている。そこに織り込まれているのは、逆再生している映像と、逆再生によって浮かび上がる「時は戻らない」という言葉、そして「時は戻らない」世界で映像を観る鑑賞者である。

制作室 13

ギャラリー南の奥のスペースを「制作室 13」と名付け*、臨時のスタジオを設置。会期中、作家が不定期に在室し、作品制作をおこなう。また、ここでは来場者が被写体として作品制作に参加することができ、撮影された映像は《時は戻らない》の本展特別バージョンとして、ギャラリー南前に展示される。※撮影は作家在室時のみ実施。

*制作室とは、京都芸術センターが無償で提供する、芸術家のための制作スペースの名前。館内各所に12のスペースがあり、支援事業の選考で選ばれた芸術家が稽古場やアトリエとして利用している。